

第 119 号

平成二十八年 度前期
研究大会・研修会特集
各支部・各学校より



未来に生きる子どもたち

三河教育研究会 副会長
鳥 居 弘 一



「授業がうまくならない」「たくさん発言があるといい」「子ども同士の意見がつかない」とい

これは、本校が研究委嘱を受けたときの、若い教員の願いです。教師の職務の柱は授業であることをきちんと捉え、指導力の向上を目指す姿です。ただ、願

や思いは大きく、書物や先輩の声に救いを求めているものの、それを具現化する手段を見つけ出せずに、子どもの経験や既成概念、子どもの認識の仕方よりも、活動や知識の習得にばかり目を向けているようにもありません。

しかし、研究が進み、授業案検討会、研究協議会等を重ねていくうちに、教科等指導員、講師の先生、先輩教師の意見に方向や方法を学び、授業づくりに成長が見られるようになりました。

校内の授業研究は、同じテーマをもつ教員が、互いの経験をもとに知恵を絞り出して授業案づくりを行います。そして、参観者も自分が授業をやっているがごとく授業者になりきって参観します。です

から、協議会も本気で議論します。自ずと指導力の向上につながったのだと思います。

そして、若手教員は、「授業がうまく流れた、発言が多かった」という見方から、「こんな意見が出てきた、こんな考え方もあるのか」と、子どもの成長、子ども本来の能力に気付くようになりました。「できるように、わかるように」の思いから進化して、「考える力、判断する力を育てたい」「授業を通して、子どもの能力を発揮させたい」と、考えるようになってきました。

十年後には、AI（人工知能）の発達によって、職業が大きく変わると言われています。事務員、販売員、営業員、会計士、運転手などの職業の、一部の分野はなくなると予想されています。さらに、二十年後には労働人口の五十%近くが、AIやロボットに変わる可能性もあるそうです。このことを、マスコミを通して知ったとき、大きな衝撃でした。

私たち教員は、日々の職務に追われがちです。今日の子どもの指導に精一杯なときも少なくありません。しかし、教壇に立ち指導するとき、今日の必要なことを教える指導と捉えるだけでなく、未来を生きたための指導をしていることも頭に置いておきたいものです。子どもたちが将来にわたって必要な力を如何に得ていくか、老若男女混ざり合って、お互いに語り合いたいと感じています。

これからの生活に生きる書く力

三河女性役職者会 会長
高 橋 由美子



日頃の習性で、人が文字を書く手元をついつい見てしまいます。とりわけ領収書をもらうときには、手元が美しく、書かれた文字が整っていると、うれしい気分になるものです。

昨年の六年生M子が、ある新聞にこんな投稿をしました。「私の通う学校の校長先生は、私たちに書くことの大切さを熱心に教えてくれます。一略一これらの取り組みを通して、感じたことが二つあります。一つは、書くことで気持ち

ります。一つは、書くことで気持ちがよい伝わるといことです。メールや無料通信アプリで簡単に気持ちを伝えられるようになりましたが、書くという手間を加えることで、気持ちがより伝わると思います。二つ目は、日本の文化に触れられることです。日本人は昔から墨と筆で字を書き、気持ちを伝えてきたので、書写の授業などを通して日本の文化を学び、日本のことを深く知ることができると思っています。これからも、書くことを大切にしていきたいです。」

山中小学校は、「生活に生きて働く『書く力』の育成」を研究テーマに教育活動

を行っています。現代は文字を活字で表示することが多くなっていますが、子どもたちを取り巻く環境では、手書きの文字はなくならない、いやなくしてはならないと確信します。子どもたちが手にする筆記具は、筆や鉛筆・ボールペンなど、さまざまです。「手は外部の脳」と言われるように、書字活動において、手は字形だけではなく筆圧を感じます。メモを取る速書きと相手を意識して丁寧に書く場面では、手にかかる筆圧は違います。その圧を脳で感知して、手が働くのです。したがって、場面に応じて意識して書くことによって、脳を育んでいるのです。また、書く行為は、正確な情報を記録する、自分の考えを確かにする、思いを文字にのせて伝えることができ、さらに、脳の働きを活発にさせているのです。

主体的・対話的な深い学びが求められる「アクティブ・ラーニング」は、教師主導型と思われがちな書写の授業においても実現できます。教材文字から子ども一人一人が課題を決め、対話によって文字の原理・原則を見つけて、他の文字にも生かして書くという課題解決的な学びです。それは、今だけではなく、これからの社会生活にも活用できる「書く力」となります。

私は長年、書写教育に携わらせていただきました。その証を、今の教育現場で発揮することができ、この上ない喜びを感じています。M子のような子どもを、一人でも多く育てていこうと思います。

子どもを中心に据えた教育の成果を分かち合う

—平成28年度 研究大会・研修会（夏季）を終えて—

総務委員会

総務委員会では、五月十八日の定期総会以降、役員会・常任委員会を開催し、常任委員会の活動計画や各部会・各種委員会の夏季研修会等の充実について、協議を重ねてまいりました。

本年度は、夏季休業中に十七の研究大会・研修会が開かれ、生き生きと学ぶ子ども姿の実現を目ざし、よりよい授業づくりのヒントを得ようと活発な議論が展開されました。今秋には五つの研究大会・発表会が計画されています。なお、研究大会・研修会で提案された指導案は、ホームページ

（P12下段参照）に随時掲載していきます。

授業力養成講座Ⅰは、八月二十三日に高浜市中央公民館、二十六日にライフポートとはしにて開催しました。約一二〇名の受講者が集い、熱心に研修が進められました。研究大会や研修会、授業力養成講座で学んだことを各学校で分かち合い、子どもを中心に据えた教育の推進に生かしていただくことを期待します。

最後になりましたが、研究大会・研修会の運営に際し、関係教育委員会・関係機関の方々にご協力いただきましたことに感謝申し上げます。

部会・各種委員会

研究大会・研修会の報告

国語

「自らの言葉の力を磨き、 ともに高め合う授業」

平成二十八年度 国語部会夏季研修会
期 日 八月五日（金）
場 所 刈谷市産業振興センター
あいおいホール
参加者 四百八名

講演会「君は『最後の晩餐』を知っているか」を読む
講師 東京芸術大学美術学部准教授 布施 英利 氏

多くの先生方のご参加を得て、午前中は七つの分科会に分かれて研究協議を、午後からは全体会と講演会を行いました。午前の分科会では、研究テーマ「自らの言葉の力を磨き、ともに高め合う授業」に沿った実践について提案がなされました。協議会では、子どもの言葉の力を磨くとはどういうことか、また、そのために必要な教師支援とは何かについて、よりよい授業づくりのヒントを得ようと、活発な議論が展開されました。

午後の講演会では、東京芸術大学准教授である、布施英利先生を講師にお迎えしました。講演の前半では、布施先生が中学二年生の国語の教科書のために書き下ろされた、「君は『最後の晩餐』を知っているか」についてお話ししていただきました。講演の後半では、プロジェクター

で映し出したレオナルド・ダヴィンチの諸作品を見ながら、その歴史や特徴、背景などについて、たいへん貴重なお話を伺いすることができました。

本研修会を支援してくださった刈谷地区、碧南地区の先生方、提案・助言・司会の先生方に心より感謝申し上げます。



ご講演される布施英利先生

筆者の思いに目を向けて

岡崎・岩津中 藤野 智世
夏季研修会では、中学校・読むことの分科会に参加しました。説明的な文章の読解を、筆者の思いに焦点を当てて展開していくための具体的な手立てを提案していただきました。結論からの読み取りや、まとめと具体例の関係の把握、情報を批評するための話し合い活動など、学びの多い協議会となりました。

また、講演会では、『最後の晩餐』や『モナリザ』などのお話を聴かせていただき、遠近法や構図がもたらす効果について教えていただきました。画家がその絵に込めた工夫やねらいについて目を向け、考えることが、より深く絵を楽しむことにつながることを強く感じました。具体的な指導方法や手立てについて学ぶとともに、言葉と感性を磨く、とてもよい機会となりました。

書写

平成二十八年度 書写実技講習会
期 日 七月二十九日（金）
場 所 岡崎市電美丘会館
参加者 四十四名
講演・実技講師 岐阜女子大学教授 中根 海童 先生

指導法の違いを理解した上で

幸田・深溝小 小栗由加里
講演「書写教科書のウソとホント」では、複数の教科書の写真を比較し、指導法の違いを学びました。軸をまっすぐ立てる筆の持ち方は日下部鳴鶴氏の四本がけ直筆が由来で、現在のやや手前に倒す持ち方は鉛筆や箸の持ち方に通じるものだそうです。机の高さは本来、へその高さだったのが、今の姿勢は、へその位置がかなり下になっています。（写真参照）教科書では半紙は体の正面に置くことありますが、腕が肩の右側から出ていることを考えると、やや右に置いた方が書きやすいというお話には思い当たる節がありました。また、「新」は三画目の穂先が右を通る字であったのが、筆使いが難しいため、今は左であることや、ひらがなの結びの形で「な」が、「は」や「ま」と同じ横結びとして指導するように変わっていることに驚きました。



書写実技に取り組む参加者

社 会

「社会に参画してこうとする子どもの育成をめざし、仲間とかかわりながら問題の解決を図る社会科の授業」〔四年次〕

平成二十八年度 社会部会夏季研修会
期 日 八月五日（金）
場 所 蒲郡市民会館
参加者 三百八十二名
講演会「社会科授業づくりの探究と
アクティブ・ラーニング」

講師 帝京大学大学院
教職研究科 教授
中田 正弘 先生
分科会 小学校 五分科会
中学校 四分科会

隔年で開催される三河教育研究会社会部会夏季研修会が、八月五日に開催されました。当日は三河全域より多くの参加者が集い、盛会のうちに幕を閉じました。講演会では、帝京大学大学院教授の中田正弘先生にお話をいただきました。先生は、本会の研究主題と関連して、授業づくりについてアクティブ・ラーニングの考え方からお話をしてくださいました。講演では、社会科を通じて自立的な学び手育てるための授業づくりについて、目的と見通しのもてる授業づくり・授業の振り返りで行うこと・評価の方法など具体的な内容を交えて話してくださいました。これは、私たちがこれまで実践してきたことがこれからの教育の流れ

においても継続できることであると価値づけていただくものでした。

講演会の後は九つの分科会に分かれ、各地区から十九の実践が提案されました。中田先生も参観され、多数の実践発表がなされていることに感心しておられました。今回の夏季研修会や本年度の研究の成果と課題を踏まえ、新テーマの設定に取り組んでまいります。最後に来賓の先生方をはじめ、分科会の内容を深めてくださった助言者の先生方、並びに関係諸機関の先生方に深く感謝申し上げます。



ご講演される中田正弘先生

地域教材と社会参画

刈谷・依佐美中 戸田 和晃

歴史学習における社会参画のあり方について考えるよい機会となりました。歴史を学ぶ中で、実際に子どもが行動をしていくことは難しいことが多いです。しかし、歴史を学びながら、子ども自身が今いる環境を考えようとするのが、社会参画の一步になると学びました。社会参画において「身近な」というキーワードは欠かせないと再確認できました。今後も地域教材を生かし、社会参画のあり方を考えられるような単元に取組んでいきたいです。

理 科

「自然を意欲的に追究し、豊かな心と創造力を培う理科学習」

平成二十八年度 理科部会夏季研修会
期 日 八月三日（水）
場 所 豊田産業文化センター
参加者 二百八十一名
講演会「わかる理科授業の進め方
―発問・実験・討論―と
アクティブ・ラーニング」

講師 法政大学教職課程センター教授
左巻 健男 先生

講演では、左巻先生が自身の豊富な経験から、子どもが科学的な探究を進めた実践について、一つずつ例を挙げながらお話をしてくださいました。金属光沢があるものはすべて金属であるという考えから、銀色に見える仁丹の表面が銀であることを発見したお話や、ジュースを飲んだ後の体重の変化についての追究で、質量保存の法則に迫ったお話などをされました。単に楽しい実験をするだけでなく、子どもが自然科学の概念や法則を主体的に学んでいくことを大切にされていた。 「ちょっと聞いてみよう。」と、先生は講演中、参加者



ご講演される左巻健男先生

に考えさせようと質問を繰り返されました。「自分が疑問にぶつかり考えた授業は印象に残る。」まさに、それを教えてくださった講演会でした。

分科会では、小学校低学年、小学校高学年、中学校において、それぞれ二つずつの実践について報告され、活発な協議が行われました。助言者の先生からは、本テーマにかかわる多くのご示唆をいただきました。

参加された先生からは「講演では具体的な実践が聞けた。授業に取り入れたい。」「分科会では、教材の工夫によって、子どもがいきいきと学ぶ姿が発表され、参考になった。」という感想を聞くことができました。また、「学校の教科部会で、理科部の先生と共有したい。」と、研修会を通して学んだことを分かち合いたいという意見もいただくことができました。

提案を終えて学んだこと

碧南・西端小 井上 達

日常生活で見かける様々な理科の現象に足を止め、「不思議だな」と感じる感性を磨き、理科の楽しさを味わわせたいと願い、四年生「ものの温度と体積」の分野で実践を行いました。

分科会では、参加された先生方から多くのご意見をいただくことができました。特に、単元の流れに沿うように教師が誘導している部分をご指摘いただき、子どもの考えを大切にすべきであったと気づくことができ、参考にになりました。

今回の発表を通して、子どもの思考の流れを大切にして教材研究をするこの大切さを学ぶことができました。

生活科

「自らの生活を切り拓く子ども」
—子どものつばやきに耳を傾け、
対話を大切にして、思考を深める授業—

平成二十八年年度

生活科部会夏季研修会

期 日 八月五日（金）

場 所 西尾市文化会館

参加者 二百名

講演会 「学習指導要領改訂の方向性」

講師 文部科学省初等中等教育局視学官

田村 学 氏

本年度の生活科部会の夏季研修会は、西尾市にて二百名の参加者を迎え開催することができました。

三つの分科会では、思考を深め、気付きを生むための手だてを意識した質の高いレポートが提案され、参加者からは夏休み以降の実践で参考になるという多くの声を聞くことができました。助言者の大学の先生方からは、「思考」に焦点を当てた研究を通して具体的な事例をもとに、思考を深めるための手だてを示していただくなど、今後の実践を深めていく上での、貴重なご助言をいただくことができました。

講演では、具体的な実践例をもとに、次期学習指導要領のポイントとなる事柄を詳しく教えていただきました。指導要領が変わっても、これまで生活科部会が目指してきた「気付きの質を高める」授

業を追究することが、

「主体的・対話的で深い学び」につな

つながっていくということがわかりました。また、参加

者からは、「学び合いを促進する教師力」についてのお話がとてもためになったという声を多く聞くことができました。

最後に、本大会を開催するにあたりお世話になりました、西尾支部の先生方に深く感謝申し上げます。

提案をとおして

豊橋・牛川小 鈴木 佳奈

子どもたちが一人一ケースで飼育をする中で虫と十分にふれ合い、友達とかかわりながら気付きを深められることをねらいとした実践を提案しました。分科会では、参加された先生方からたくさんのご意見をいただきました。また、愛知教育大学の中野先生からもご助言をいただくことができ、子どもの思考を深める支援とはどういうものか考えるよい機会となりました。今後も対話を通して子どもの思いや気付きを見とり、どのような働きかけをしたら思考が深められるか研究を進めていきたいと思えます。



新指導要領の方向性を語られる田村氏

音楽

「音楽のよさを学び かわり合い
想いを伝えて」

平成二十八年年度 音楽部会夏季研修会

期 日 八月二日（火）

場 所 岡崎市シビックセンター

参加者 百八十名

実技講習会

「音楽づくり・創作の指導と評価の実際

教科書教材を中心として」

講師 東京都港区立芝小学校教育論

石井ゆきこ 先生

本年度の研修会では、キーワードを、「分かち合い」「学びの広がり」として、教科書教材を中心とした、音楽づくり・創作の指導と評価について、ご講演をいただきました。

新教育課程の動向をはじめ、音楽づくりの授業の導入や実際、音楽づくりの七つのポイントをわかりやすく教えていただきました。特に音楽づくりの授業の実際では、講習に参加された先生方がグループをつ



ご講演される石井ゆきこ先生

くって、「まねっこ」などの仕組みを使つた「かえるのコーラス」や、地元のことを紹介する「言葉でリズムアンサンブル」をつくりました。完成した作品を舞台上で発表したり、実際に子どもたちがつくった作品を鑑賞したりするなどして、「音楽づくりって楽しい」と実感するとともに、教えていただいたことを実践していきたいと、意欲をもつことができた講習会となりました。

夏季研修会に参加して

豊田・浄水小 大代 知穂

教科書教材を中心に、自分たちが実際に音楽づくりを行うことで、子どもが「音楽づくりって楽しい」「友達と一緒にやるともっと楽しい」と感じられる工夫を、体験的に学ぶことができました。

低学年では、「かえるの音あそび」の導入として、絵本「けろけろ ころろ」を読み聞かせたり、ユニークな鳴き声カードを準備したりすることで、それぞれに楽しい鳴き声をすることが工夫できました。それを「まねっこ」や「いっしょ」などの仕組みを提示し、自由に組み合わせることで言葉のアンサンブルができあがりました。音楽づくりのてがかりとなる条件を適切に設定することにより、子どもの自由な発想を生かすことができるのだと感じました。「おもしろそう」「やってみよう」「できた」「楽しい」「次は」と広がる活動を工夫していきたいです。

造 形

「子どもの思いが広がる造形教育」

平成二十八年度 造形部会夏季研修会
期 日 八月四日（木）
場 所 豊川市文化会館
参加者 百八十二名
講演内容「私のアート人生」
講師 画家 斎藤 吾朗 氏

小学校百八名、中学校七十四名の計百八十二名の参加があり、盛況のうちに開催することができました。

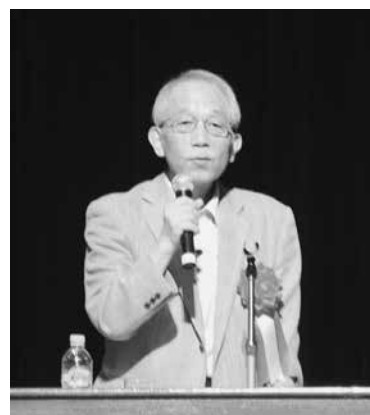
本年度は、西尾市在住の画家斎藤吾朗氏を講師にお招きし、その人生を語っていただくことで、造形について、生き方について考える機会をいただきました。

講話では、絵を描くことが大好きだった少年時代の話から始まり、西尾での教員時代の話、フランス留学、モナ・リザ模写を許可された話など、様々なエピソードが画像とともに紹介されました。

氏は、モナ・リザ公認模写をきっかけに故郷を描き始め、ニューヨーク、ボストン、ヘルシンキなど、世界各地で個展を開かれました。赤を基調として表現された人物の絵は、力強く、どこか懐かしさを覚える作品が多く、三河に住む私たちの心に強く語り掛けてくるものがありました。

研究会には、多くの先生のご協力をい

ただきました。関係の方々に深く御礼申しあげます。



赤絵について語られる斎藤氏

造形部会夏季研修会に参加して

豊川・東部中 池田まゆみ

『モナ・リザ』の公認模写を許されたアーティスト、斎藤吾朗さんの講演では、普段なかなか聞くことのできない、作者の思いや作品のエピソードなど、貴重なお話をたくさん聴くことができました。

なかでも、「模写を通して、レオナルド・ダ・ヴィンチの母や故郷への想いを感じ、自分も身近なものを描くべきだと悟った。」というお話が印象的でした。また、赤絵と呼ばれる鮮やかな赤い色調で、身近な風景や題材を描く作品の力強いメッセージを知りました。ぜひ、展覧会に足を運んで、実際に作品を覗いてみたいと感じました。今後の授業で、生徒が作者の思いに迫るような作品を取り入れ、美術の魅力を伝えていきたいと思います。

保 健 体 育

「課題に気づき、解決に向けて主体的に活動する体育学習」 〈一 年 次〉

平成二十八年度 保健体育部会夏季研修会
期 日 八月三日（水）
場 所 豊田市福祉センター
参加者 三百五十六名
講演会「野球とわたし」

講師 名古屋商科大学野球部総監督

小学校部会研究協議会 中村 順司 氏

助言者 愛知大学教員 森 勇示 先生
発表者 田原・童浦小 石川 雄一 先生
中学校部会研究協議会
助言者 愛知大学教員 上原三十三 先生
発表者 碧南・新川中 磯貝 征伯 先生

全体会では、三教研副会長の白井博司先生のあいさつに続き、豊田市教育委員会教育長の福嶋兼光様よりご祝辞をいただきました。

講演において、中村順司先生には、PL学園での野球指導を通して大切にしていただいたことを体験談を交えながらお話しいただきました。参加者の先生方からは、「部活動指導にすぐにも取り入れたい」という声が多く聞かれ、実りの多い講演会となりました。

研究協議会において、小学校部会では、課題解決に向けて仲間と楽しく活動する「プレルボー



ご講演される中村順司先生

ル」の実践が、中学校部会では、意欲的に運動に取り組み、仲間とかわりながら思考力・判断力を高めることをねらった「アルティメット」の実践が提案されました。参加者の先生方からは、質問や意見が次々に出され、充実した協議会となりました。また助言者の先生方からは、発表者の実践に即したご助言と今後の実践に役立つお話をいただきました。

最後に、この研修会でお世話になりました豊田・みよし地区の先生方、各地区運営委員の先生方に深く感謝申し上げます。

課題に気づき、主体的に課題解決するために

豊田・野見小 浦地 弘典
どうすれば子どもたちが自分のやるべき課題に気づき、解決に向けて主体的に活動するようになるのか。数々のプロ野球選手を育てた中村氏のご講演から様々なことを学ぶことができました。子どもたちが自ら考え行動できるようなタイミングを図った声掛け。子どもの目線に立ち、それぞれの個性に応じた指導。それらが子どもの主体性を高めるため、いかに大切なのかをあらためて感じることができました。

小学校部会では、石川先生の実践や参加した先生方のご意見をもとに、課題に気づかせるためにどのような手立てを工夫をしているか。また、どのようにすると課題解決に主体的に取り組めるかについて協議を行いました。森先生のご助言からは、子どもが課題に気づくために、教師の意図をもったゲームや勝敗にこだわることの大切などを学ぶことができました。学んだことを今後の実践に生かしていきたいと思っています。

英語（外国語活動）

「心豊かな

「コミュニケーションをめぐって」

平成二十八年年度

英語（外国語活動）部会夏季研修会

期 日 八月五日（金）

場 所 ライフポートとよはし

参加者 二百五十一名

研究発表・研究協議

講演会「Focus-on-Form Approach to English Education in Japan」

講師 上智大学教授

和泉 伸一 先生

本年度の英語（外国語活動）部会夏季研修会がライフポートとよはしで開催されました。各地区より、多数の参加者があり、盛大に開催することができました。開会式後、安城市立安祥中学校新田紋子先生、豊橋市立二川中学校星野匠先生、蒲郡市立塩津小学校稲熊奈々美先生、豊田市立山之手小学校加藤洋太先生、以上四人の先生方の研究発表、そして、研究協議会を行いました。

分科会終了

後、上智大学教授、和泉伸一先生にご講演いただきました。言語習得における三つの要素についての話を軸に、



提案する加藤先生

文脈によって使う英語を考える重要なことについて教えていただきました。和泉先生からの質問に参加者同士が英語で会話する場面もありました。講演のほとんどを英語で話されましたが、具体例が多く、多くの先生方からわかりやすかったとの感想をいただきました。最後にこの研修会を開催するにあたって多大なご協力をいただきました豊橋市教育委員会、並びに豊橋支部の英語部の先生方に深く感謝申し上げます。



ご講演される和泉伸一先生

夏季研修会に参加して

豊橋・牟呂中 安井美千代

第一分科会では、英語の実用性を生徒に感じさせるための工夫や、言語活用場面の設定が具体的な実践とともに発表されました。帯活動や、三ステップを踏まえた英作文の取り組みなど、今後の授業に取り入れてみたいと感じました。

和泉伸一先生のご講演では、四技能でのコミュニケーション能力を育成するために、「なにを（意味）」「どのよう（形式）」「いつ・どこで（機能）」の三要素のバランスが重要であることを学びました。今後は、文法導入時は chunk-underline の用法を用いて、質のよいインプットに挑戦しようと気持ちを高めることができました。

道徳

「豊かな心を持ち、他者と共によりよく生きる子どもを育む道徳教育」

平成二十八年年度 道徳部会夏季研修会

期 日 八月五日（金）

場 所 豊川市文化会館

豊川市勤労福祉会館

参加者 二百四十名

講演会「他者と共によりよく生きる子どもを育む道徳教育～問題解決的な学習で創る道徳授業～」

講師 岐阜大学大学院教育学研究科准教授 柳沼 良太 先生

分科会 小学校低学年、小学校中学年、小学校高学年、中学校の四分

科会による実践発表・討議

道徳部会夏季研修会が、豊川市文化会館、豊川市勤労福祉会館で開催され、各地区より二百四十名の参加者を得て、盛会のうちに終えることができました。

はじめに、岐阜大学大学院教育学研究科准教授の柳沼良太先生にご講演をいただきました。道徳科のアクティブ・ラーニングの指導法として問題解決型の授業展開について、話し合い、育成すべき道徳性や多面的・多角的に考えるヒントをもとに、いじめ問題を教材とした事例を挙げながら具体的に紹介



授業展開について語られる柳沼先生

いただき、大変有意義な時間を過ごすことができました。

講演後は、四分科会に分かれ、活発な質疑応答および意見交換がなされました。小学校低学年部会では、よりよい人間関係を築く子の育成を目指した授業実践が報告されました。中学年部会では、誰もがわかりやすく、集中して取り組める道徳の授業実践が報告されました。高学年部会では、互いに認め合い、友達を大切にする子の育成を目指した授業実践が報告されました。中学校部会では、自己肯定感を高め、思いやりのある人間関係を築ける生徒の育成を目指した授業実践が報告されました。今後の研究推進について、提案者の工夫あふれる実践の紹介により、実りのある研修会となりました。

道徳部会夏季研修会に参加して

豊田・東山小 前田 麻衣

今回の講演では、これからの道徳授業に、アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れ、問題解決的な学習で創る授業展開の必要性について学びました。

子どもたちが多角的・多面的な視野をもつために、実際の資料の発問例をいくつか紹介してくださったり、役割演技やシミュレーションを取り入れた体験的な学習活動の仕方などを教えていただいたりして、大変参考になりました。

新しい道徳の授業づくりに向けて、教師の多様なアプローチの仕方を学ぶ、有意義な時間となりました。これからの授業に役立てていきたいです。

特別活動

「豊かな心とたくましく実践する力を
育てる特別活動
～主体的・協働的に取り組む集団活動を通して～」

平成二十八年度

特別活動部会夏季研修会

期 日 八月二日（火）

場 所 豊田産業文化センター

参加者 二百九十四名

講演会 「折れない心の育て方」

～自己肯定感・他者信頼感
を高める動機づけ～

講師 エスケイケイ代表取締役社長
麓 聡一郎 氏

講演会では、麓聡一郎氏よりお話をいただきました。子ども自己肯定感・他者信頼感を高める動機づけのポイントを具体的に提示されながら「折れない心の育て方」について講演くださいました。「教師をはじめとした大人が自己肯定感を高めることの大切さや、言葉や表情・態度で子どもを『ほめる』『励ます』『認める』ことの大切さを学びました」という声がたくさん集まるなど、大変好評でした。

講演会後には、小中学校ごとに分科会を開催しました。それぞれ二人の先生から実践を提案していただき、活発な協議が行われました。参加された先生からは、「活動後の振り返り、話し合いを大切にして、子どもたちが主体的・協働的に取り組む集団活動をめざし、頑張っている先生方

から刺激を受けました。縦割り活動やP
DCAサイクルなどの実践のアイディア
をぜひ取り入れていきたいです。」といっ
た内容の感想が、多数寄せられました。

研修会を開催するにあたり、豊田地区

特別活動部

会の先生方

に、たくさ

んの協力を

していただ

きました。

感謝申し上

げます。



表情豊かに講演される麓氏

子どもと向き合うこと

みよし・三好丘中 林 勝也

麓氏の講演会では、大人としての責
任、教師としての責任について改めて
考えることができました。自分の言動
が子どもに与える影響の大きさや、子
どもに願いを込めて教育することの大
切さを再認識しました。

分科会では、提案者として参加させ
ていただきました。実践をまとめ、協
議を行うことで、たくさん先生方から
貴重なご意見をいただき、特別活動
の教育的意義や、取り組みを改善する
ための新たな視点に気づきました。

今回の研修で学んだことを生かし、
子どもと向き合い、今後も子どもの未
来の姿を見つめながら豊かな心とたく
ましく実践する力を育てていく取り組
みをしていきたいと思っています。

特別支援教育

「二人一人の教育的ニーズに応じた
教育のあり方を目指して」

平成二十八年度

特別支援教育部会夏季研修会

期 日 八月五日（金）

場 所 愛知県青年の家

参加者 愛知県立みあい特別支援学校
四百九名

講演会 「障害がある子どもたちの
理解と支援」

～特別支援学級における
指導を中心にして～

講師 西尾市教育委員会・
特別支援教育アドバイザー
濱田 照男 氏

開会行事では、清水文克部会長、原田
隆行三河教育研究会会計監査のあいさつ
に続き、愛知県教育委員会特別支援教育
課指導主事の鈴木則明先生からご祝辞を
いただきました。

講演会では、講師の
濱田照男氏
から、子ど
もの実態把
握、特別支
援教育の教
育課程、指



「声かけ」についてご教示される濱田照男氏

導方法など、私たち指導者に必要不可欠
な特別支援教育における基礎知識など
を、幅広く講演いただきました。また、
子どもたちに、視覚的・具体的・肯定的
に声をかけることの大切さについて、「声
かけ変換表」などで、具体的な場面を挙
げてご教示いただきました。

午後は、六つの分科会に分かれ、提案
者の先生方から、明日からの授業にすぐ
に生かすことのできる実践発表がありま
した。また、グループ討議では、各分科
会のテーマに沿っての意見交換や、先生
方が日頃取り組まれている課題やその対
策等についての情報交換がなされました。

最後になりますが、岡崎市教育委員会
をはじめ、岡崎・幸田地区の先生方のご
協力により、有意義で、充実した研修会
になりました。ありがとうございました。

かわり合い、伝え合う

高浜・翼小 野々山 智氏

今回の分科会では、子どもたちのコ
ミュニケーション能力を育成する様々な
方法を学ぶことができました。そのなかで、
自分の思いや言葉を相手に伝えることが
できたときに認めてくれる教師や仲間の
存在が、子どもたちの成長を一番に促し
ていることがわかった。また、子どもた
ちの意欲を高め、主体的に活動すること
ができる支援グッズを用意しておくこと
が大切であることも感じた。

これからも、この会で学んだ研修内容
を、日々の教育実践に生かしていきたい。

総合的な学習

「自ら探究し、共に学び合う 総合的な学習の授業」(三年次)

平成二十八年年度

総合的な学習部会夏季研修会

期 日 八月九日(火)

場 所 安城市文化センター

参加者 二百十名

講演会「見え始めてきたH29年版総合学習
—生活科・総合ワーキングの
議論から—」

講師

名古屋大学大学院

教育発達科学研究科准教授

久野 弘幸 先生



新学習指導要領について語られる久野先生

久野先生は、ご講演の中で、新学習指導要領についてお話されました。NHKの番組「エデュカチオ」の映像を交えながら、総合的な学習で育成すべき力についてわかりやすく解説をいただきました。「思考ツール」「思考スキル」などの具体的な手立てについても紹介してくださいました。

その後、五つの分科会に分かれて、地域

教材やキャリア教育などをテーマにした十地区からの実践が提案されました。それをもとに分科会ごとに協議が行われました。各分科会で参加してくださった方の熱心な意見交換や、助言者の先生のご助言により、充実した時間を過ごすことができました。

夏季研修会に参加して

刈谷 刈谷南中 当山 紀善

分科会の一つ目の発表では、野外学習をうまく活用することで、児童が自分たちの住む地域に興味をもてるようにしていました。また、地域の方へのインタビューや児童同士での感想交流を盛んに行わせることで、より児童たちの心に残る学びとなっていました。二つ目の発表では、学校の近くを流れる川を題材として取り上げ、地域のホテルの会や企業の環境プログラムを活用しながら学習を進めていました。どちらの発表も、学校が地域と積極的にかかわりをもち、ともに協力する姿がとても印象的でした。

助言者の先生からは、総合的な学習の時間の授業づくりをより確かなものにするために、「身につけさせたい力」を見極めることが大切だというお話をいただきました。授業が進んでいく中で、どのような力を身につけさせたいかを常に意識しておくことで、ゴールに向かってぶれない授業づくりをすることができるとご指導いただきました。

今回の発表やご指導を、今後の総合的な学習の時間の授業づくりに役立てていきたいと思っています。

算数・数学(愛数研)

「主体的・協働的に学ぶ 算数・数学教育の実践」

平成二十八年年度

愛知県数学教育研究会

小中学校部研究大会(豊田大会)

期 日 八月十日(水)

場 所 豊田市福祉センター

参加者 五百十七名

講演会「特別支援教育の動向と
算数・数学教育への
貢献の可能性」

講師

筑波大学教授

柘植 雅義 先生

平成二十八年年度愛知県数学教育研究会

小中学校部研究大会を、八月十日に豊田

市福祉センターで開催しました。

午前は、小中学校あわせて十二の提案を六分科会に分かれて協議しました。それぞれ分科会で、「主体的・協働的に学ぶ算数・数学教育の実践」のテーマのもと、「かわり合い」「算数・数学的活動」「思考力・表現力」などをキーワードに各校の実践が提案され、活発な討議が行われました。また、最後に助言者である大学の先生方から、実践に対する改善点や今後の授業に役立つご助言をいただき、たいへん充実した研修の機会となりました。

午後は、筑波大学教授の柘植雅義先生より「特別支援教育の動向と算数・数学教育への貢献の可能性」という演題で講

演をしていた
できました。

今年四月より
障害者差別解
消法が施行さ
れ、学校にお
いてもその対
応が求められ
ています。柘



支援の必要性について語られる柘植先生

植先生には、「児童生徒一人ひとりの教育的ニーズ」にあわせた支援の必要性について教えていただきました。「学校の中・教室の中は、多様性に溢れている」という柘植先生のお言葉を念頭に置きながら、個に応じた支援に、一層力を入れていきたいと、考えを深めることができました。

子どもをどう伸ばしたいか

豊橋・羽田中 鈴木 直

子どもたちが、より「学びたい」と思う授業をしたと考え、中学校の分科会に参加しました。ペアやグループ学習の手法とともに、一つの授業、一つの単元において、子どもたちをどう伸ばしたいか、という教師の強い思いをもって授業を考えることの大切さをあらためて感じました。

講演会では、特別支援教育の視点からの個に応じた指導法がとても参考になりました。授業や学級経営の中で、全ての子どもたちに応じた支援をするため、これまでの取り組みを見直していきたいと強く思いました。

養護教諭（愛養研）

「未来に輝く子どもをばぐくむ 養護教諭の専門性と役割の追究」

第二十七回愛知県養護教育研究大会

期 日 七月二十九日（金）

場 所 日本特殊陶業市民会館

参加者 一〇一四名

講演会 「学校での体調不良、ケガ

症状のポイントとは？」

講師

あいち小児保健医療総合センター
救急科医長 伊藤 友弥 氏

研究発表では、はじめに西春日井地区養護教諭研究会から、「子どもの成長過程における健康課題の解決を目指して―異校種（幼保・小・中・高）との連携を生かした保健指導―」をテーマに、異校種と協力した継続的な保健指導を実践するための連携について発表がありました。異校種との協働した保健指導が子どもの変容に重要なことを学びました。次に、新城市養護教諭部会から、「救急処置活動における新城市養護教諭の力量向上を目指して―アセスメント能力向上のための取組と児童生徒、教職員への働きかけ―」をテーマに判断力を含めた救急処置の力をつける研修について発表がありました。

調査研究報告では、「養護教諭としての専門的力量的向上を目指して―救急処置活動における養護教諭の行うアセスメント能力の向上に対する意識・取組から考える―」をテーマに、調査結果報告と緊急度・重症度の高い事例の紹介がありました。新城市の発表、調査研究報告ともに、教職員との連携を深めることや児童生徒の救急処置能力を高める教育活動へ広げていくことの必要性を確認しました。

講演では、教育現場で起こりうる疾患と症状に合わせた身体診察について、実演を交えて具体的に教えていただきました。事例に応じた対応の仕方がわかり、今後の救急処置活動に大変参考となるものでした。



実演指導される伊藤友弥氏

愛知県養護教育研究大会に参加して

蒲郡・形原北小 山口 愛未

西春日井地区と新城市の先生方の発表を聞き、異校種との連携、専門的な力量向上のための効果的な実践が大変参考になりました。調査研究部の報告では、アセスメント能力を向上させるために、日々の執務を振り返り、自分が補うべき技術を把握して実技研修に取り組む必要性を感じました。

最後に、身体診察の実演を交えた伊藤友弥先生の講演では、緊急性の疾患かどうか見分ける判断のポイントを学びました。

養護教諭の重要な職務である救急処置活動において、根拠をもち、素早く正確に判断や処置が行えるよう、より一層の研究に努めたいと決意する研究大会でした。

学習情報

「ネットワーク社会における 豊かな学びとメディア」

平成二十八年年度 ICT活用研究会

期 日 八月三日（水）

場 所 豊川市文化会館

参加者 二百五名

提案者および発表テーマ

①豊橋・幸小 戸荻 敦志 先生

「インターネットの世界を正しく理解し、望ましい使い方ができる子の育成」

②豊川・御油小 米澤 好生 先生

「ネットゲームの光と陰」

③豊田・保見中 篠原 啓史 先生

「情報活用能力を高める社会科学習を通して、すすんで課題を追究する生徒の育成」

④安城・二本木小 稲垣 勇穂 先生

「ICTを活用した『学び合い』の授業作り」

⑤幸田・北部中 神田祐太郎 先生

「自他の命を尊重し、目標をもってたくましく生きる生徒の育成」

助言・講評

西尾市立吉良中学校長

嶋崎 徹 先生

平成二十八年年度ICT活用研究会を八月三日に豊川市文化会館で開催しました。各地区からの提案では、インターネットに対するより深い理解や、望ましい活用の仕方、情報を正しく活用するための情報モラル教育など、今日のかつ多岐に渡った内容が発表されました。

助言、講評をいただいた嶋崎先生からは、日々の授業の中で、効果的にICT機器を活用することによって、子どもたちの学びを深めていくという視点の大切さを教えていただきました。ICT機器を授業でどのように生かしていくのかについて、たいへん中身の濃い研修の機会となりました。



機器の活用について語られる嶋崎先生

ICT活用研究会に参加して

豊田・保見中 篠原 啓史

本研究会では、情報モラルの授業実践やタブレット端末の活用実践など、興味深い報告が行われました。タブレット端末の活用実践では、上級生が下級生にタブレット端末の使い方を教える活動や、各学年の活用授業紹介があり、とても参考になりました。

また、嶋崎徹先生が助言・講評で話された「デジタル＋アナログ」が、とても興味深い内容でした。プロジェクトと黒板とチョーク、疑似体験と実体験など、デジタルとアナログそれぞれの良さを状況に応じて生かしたり、ときに融合させたりすることで、子どもの豊かな学びの実現につながることをわかりました。

今回学んだことを、今後のICT機器活用に生かしたいと思います。

学校慢 学白

NEXT30

みよし市立三好中学校

本年度、本校は創立七十年目の節目を迎えています。地域に根ざした中学校として、多くの卒業生が地元で活躍し、本校を支えています。現在の生徒は三十年後の創立百年の頃には保護者となっていて自分の子どもを三好中学校に預ける立場になっているでしょう。七十年目も大きな節目ですが、百年というもっと大きな節目を意識して生活することは夢が広がります。そこで、「NEXT30」と題したプロジェクトに取り組み始めました。プロジェクトを通して、現在の学校づくりに積極的に参加するとともに、卒業後も母校に夢と期待を寄せる生徒を育てていきたいと考えています。

プロジェクトの一つ目の柱は「小中連携を活かす」ことです。本校は昨年度まで国立教育政策研究所委嘱の研究に取り組んできました。小中学校の繋がりを大切に、不登校を未然防止するような、「笑顔あふれる学校づくり」を今年度も引き続き推進しています。

二つ目の柱は「地域の先輩を活用する」ことです。卒業生や地域で活躍する職業人から講演を聴いたり、授業におけるゲストティーチャーとして活用したりすることで、生徒は自分の夢をより具体化し

て、積極的に学習に取り組んでいくことが出来ます。

三つ目の柱は「三十年後に伝えたい取り組みを生徒とともに創り上げる」ことです。現在本校は生徒会活動がとても活発になっています。今年度は生徒の発案から、住民とともに取り組む「地域交流美化活動」が実施されるなど、新たな活動に挑戦しています。

創立百年の節目には、地域にとって自慢の「三好中学校」となるよう、生徒とともにがんばっていきます。

(文責・山本俊輔)



地域の人と行う清掃活動

研究校紹介

豊かな心をもち、
共にによりよく生きようとする子の育成

高浜市立高取小学校

本校は、平成二十七年より高浜市教育委員会の研究委嘱を受け、研究主題を「豊かな心をもち、共にによりよく生きようとする子の育成」とし、道徳教育の研究を進めています。

本校の児童は、授業や行事に意欲的に取り組み、友達の意見とつなげながら進んで自分の意見を言える子が多いです。一方で、自分の考えにどこか自信がなく、

友だちの意見を安易に受け入れたり、周りの雰囲気流されたりするなど受け身な姿が見られます。

そこで、友だちと豊かなかかわりをもって、学んだことを生かしたり、様々な場面で対応しようとしたりする主体的に行動できる子の育成を目指し、道徳教育に力を入れてきました。中でも特に、道徳教育の要となる「考え、議論する道徳科の授業」を意識して実践を行ってきました。道徳的実践力のある子を育てることをめざしています。

道徳の授業では、場面絵やキーワードの書かれたセンテンスカードを提示しながら語り聴かせる等、教材提示の方法を工夫することで、児童が教材に引き込まれ、興味をもって授業に参加することができました。また、主発問にテーマ発問

や問題解決型の発問を取り入れることによって、児童から多様な考えを引き出し、児童が道徳的価値を多面的に考えることが出来ました。さらに、児童の考えを分類したり、価値にせまる考えを黒板の中心に板書したりする等、板書を工夫することで、児童が友だちの考えと比べながら道徳的価値に対する考えを深めることが出来ました。

平成二十九年の秋に、研究発表会を開催します。当日は全学級が道徳科の授業を公開する予定です。多くの方にご参観いただきご指導いただければ幸いです。

(文責・伊庭俊也)



教材提示を工夫し、語り聴かせる

私の研究

自ら課題を追究し、考えを深める子の育成

～「謎の液体の正体をあばこう！」の実践を通して～

設楽町立名倉小学校 原田 慶佑

研究を行いました。

二 実践について

(一) 謎の液体A～Eの正体をあばく。
理科室から謎の液体が入ったフラスコが発見されたと教材を提示し、液体の正体をあばいてほしいと課題を示しました。液体の正体をあばくことは、児童にとって興味深い課題となりました。中でも、時間が経った炭酸水は中性を示し、本来酸性であるものがどうして中性を示すのか追究する中で、炭酸水の性質について迫る課題が生まれました。

(二) 炭酸が抜けると中性になるのか。炭酸水が中性になる理由を追究するた

一 はじめに

私たちの生活の中には、理科の学習と関係する商品が多くあります。トイレの洗剤や飲料水、調味料をはじめ、何気なく使っている製品の多くを教材として利用できます。今回は、子どもたちにとって身近な物を謎の液体として取り上げ、謎の液体の正体をあばくという課題追究を行いました。物の性質や規則性が、私たちのくらしを豊かにするために利用されていることを実感させたいと願い、本

め、実験方法を考えました。飲み残しの炭酸飲料をしばらく放置すると炭酸が抜けるという生活経験から、振って炭酸を抜くという方法を思いつきました。そこで、市販の炭酸水をペットボトルに入れ、五十回振るごとに、リトマス紙で確かめました。二百回振ったところで中性を示し、炭酸水が中性になることが明らかにまりました。この実験から炭酸水の性質を理解するとともに、炭酸飲料の特徴を理解することにもつながりました。

三 おわりに

身近な物の性質や規則性を自ら考えた実験や観察を通して追究することで生活体験と結びついた理解を得ることができました。これからも私たちのくらしと理科の学習とを結びつけるための手立てを探っていきたいと考えています。



ペットボトルを振り、実験を行う児童

今後の研究会のご案内

*第54回愛知県へき地教育研究大会

「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く 子どもの育成

―学校の特性を生かした学校・学級経営と学習指導の深化・充実―

10月25日（火）東栄町立東栄中学校

11月2日（水）新城市立黄柳川小学校

*東海・北陸地区中学校 技術・家庭科研究大会
愛知県中学校 技術・家庭科研究大会

「よりよい生活に向けて、最適解を求め続ける生徒の育成」

―考えの広がりや深まりを大切にしたい問題解決的な授業を通して―

10月27日（木）名古屋市教育センター

10月28日（金）岡崎市立翔南中学校

*愛知県家庭科教育研究会 豊川大会
「未来を創り出す豊かな心と確かな実践力を育む家庭科教育」

11月2日（水）豊川市立牛久保小学校

*愛知県生徒指導研究大会
「豊かな心と社会性を育む生徒指導をめざして」

11月22日（火）豊田市民文化会館

*愛知県統計教育研究発表会・講演会
「生きる力を育てる 統計教育」

11月22日（火）愛知県図書館



【お詫び】

教育みかわ第一一八号に誤りがありましたので、お詫びと訂正をいたします。
・六ページ上段の三教研新アドレスについて
新アドレス：www.sankyoken.jp
ご迷惑をおかけし、誠に申し訳ありませんでした。

編集後記

「カチカチカチ……」小学生の頃、駅の改札で目にも止まらぬ速さで切符を切る駅員さんに憧れました。しかし、間もなく自動改札となり、その雄姿は見られなくなりました。

ある調査によると、近い将来には約半数の仕事が自動化され、子どもたちの65%が今存在していない職業に就くといわれています。目の前の子どもたちは、そんな未知の社会を生きていかねばなりません。

今年も三河各地で、各種研修会が活発に開催されました。貴重な実践と熱い議論は、未来を担う子どもたちの「生きる力」につながると確信します。

原稿をお寄せいただいた皆様に深く感謝申し上げます。

◆表紙の写真◆

「ポタルガイド」

撮影 西尾市立室場小学校

高橋 行雄 先生

◆カット◆

愛知教育大学附属特別支援学校

神谷 宜欣 先生